

韓流ブームと対韓意識⁽¹⁾

—韓流との関連で見た韓国・韓国人イメージ
および日韓関係に対する認識—

齊藤慎一 李津娥 有馬明恵
向田久美子 日吉昭彦

1. 序

2003 年後半ないしは 2004 年前半あたりから、日本で「韓流」ブームと呼ばれる現象が注目され始めた。論者により「韓流」の定義は多少異なるが、韓国文化に詳しい小倉(2005)は、「韓流」とは主に映画・ドラマ・歌の 3 ジャンルを中心とした「韓国の大衆文化が日本や中国や東南アジアで大きな人気を得ている状況」(p.52)のことを指す、としている。

韓流ブームはまず中国や東南アジアで起こり、数年遅れて日本でも急速にブームが始まった。日本での韓流ブームのきっかけが何かについては意見が分かれているようであるが、日本でブームを一気に加速させたのは、なんといっても 2003 年 4 月に NHK 衛星第 2 で放送された「冬のソナタ」というドラマである。「冬のソナタ」はその後、NHK 総合テレビなどでも再放送され、韓国ドラマとしては異例の高視聴率を記録し、社会現象となった(三矢、2004；林香里、2005)。その後、NHK のみならず民放でも次々と韓国ドラマが放送され、韓国からの芸能人の訪日 が各種メディアで大きく取り上げられるなど、かつてないほど韓国人気が高まり、「韓流」ブームと呼ばれるようになったのである。

日本における韓流ブームやその象徴とも言える「冬のソナタ」に関しては、すでに様々な分野の研究者により数多くの論文が発表されている。例えば、なぜ「冬のソナタ」が日本で(特に中高年女性に)受容されたのかについて、ジェンダー論やメディア文化論、社会心理学など様々な視点から分析がなされている(e.g., 安、2008；長谷川、2006；林香里、2005；毛利、2004；高野・山登、2004；辻、2005)。また「韓流」を手がかりに、現代の日韓関係について考察した論考も見られる(e.g., 林夏生、2005；木村、2007；李、2006)。

本研究とより密接に関係するものとしては、韓流ブームや「冬のソナタ」視聴が日本人の持つ韓国・韓国人イメージに及ぼした影響についての研究がある(長谷川、2005、2007；三矢、2004；渡邊・石井・小針、2004)。例えば、「冬のソナタ」視聴が韓国や韓国人に対する肯定的なイメージをもたらしたこと(三矢、2004)や韓国ドラマ視聴において感情移入や

俳優に対して好意を抱くことで韓国(人)に対するイメージが好転すること(長谷川、2005、2007)などが明らかにされている。

また、韓流ブームは韓国への旅行者の増加や語学教材の売り上げ増など莫大な経済的波及効果をもたらしたと言われるように、韓流による影響は様々な側面に及んでいる(林夏生、2005；小倉、2005)。小倉は「この『韓流』ブームの特徴のひとつは、視聴者やファンの関心が単に特定の俳優や作品に留まるのではなく、(中略)『韓国語を習いたい』というような、広い意味での『韓国の文化』全般に向けられたという点にある」(小倉、2005、p.71)と指摘している。しかし一方で、韓流現象のような大衆文化交流の拡大が日韓関係の改善に役立つ面もあるだろうが、所詮一過性のブームに過ぎないといった懐疑的な見方も少なくないようだ(林夏生、2005)。

本稿では、韓流ブームに関して、これまでの先行研究で言及されることの少なかった側面について取り上げ、論じていく。具体的には、2006年末の段階で、人々が韓流ブームをどのように評価していたのか、その評価にはどのような要因が関係しているのか、韓国ドラマや映画の視聴実態と視聴による韓国・韓国イメージの変化の有無、といった問題について質問紙調査データをもとに検討していく。また、後述するようにブームのピークは過ぎたとはいえ、依然韓流現象と呼べる状況は続いていた時期に、人々は日韓関係の現状に対してどのように認識していたのか、日韓関係の良し悪しの判断基準は何なのかを、特に人々が韓流ブームをどのように評価しているのかとの関連を念頭に置きつつ検討していく。

1.1 新聞の見出しに見る「韓流」ブームの推移

「韓流」という言葉が日本の全国紙に最初に登場したのは2001年12月で、朝日新聞と産経新聞では記事の見出しに「韓流」を用いている。ただ、この時はいずれの記事も中国や台湾での韓国大衆文化ブームを伝えるものであった。2001年12月25日付けの朝日新聞の記事では、「韓流」を「韓国のドラマや映画、ポップスなどの人気が、台湾や中国大陸に押し寄せた現象を指す」(桜井・伊佐・隈元、2001、p.22)としている。日本における「韓流」を伝える記事が出始めるのは2003年になってからで、例えば「韓国ドラマなぜ受ける」と題した2003年11月11日の毎日新聞の記事では、「『韓国ドラマに夢中』という人が急増している。すでに台湾、中国などアジア各地では人気を得ていたが、ついに日本にもブーム到来。『韓国ドラマ元年』と言えそうなほど、各テレビ局で放送が相次いでいる」(戸澤、2003、p.7)と報じている。その後、上述の「冬のソナタ」による韓流ブームの盛り上がりを反映して、2004年以降、全国紙に「韓流」を見出しに含んだ記事が急速に増え始めた。

ここでは、メディアが韓流ブームをどのくらい取り上げたのかを示す1つの指標として、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の全国紙3紙に「韓流」という言葉がどのくらい使われているかを見ておくことにする。図1には、全国紙3紙の記事の見出しに「韓流」という言葉を含んだ記事件数を四半期ごとに示している。これを見ると、記事件数の変遷に3紙の間には大きな違いは見られず、件数の推移だけを見る限り、韓流ブームのピークは2004年後半から2005年前半にかけてである。このピーク時には、各紙相当数の記事に「韓流」という言葉を見出しに使っている⁽²⁾。その後「韓流」を見出しに含む記事件数は急速に減少していくが、2009年現在まで、以前に比べて数は決して多くはないものの継続的に「韓流」という言葉は新聞見出しに使われ続けていることがわかる。新聞記事の見出し件数に示されるように、すでに「韓流」ブームのピークは過ぎているが、「韓流」と呼ばれる韓国大衆文化の受容は一時のブームで終わったというより、今やブームを超えて定着した感がある。長谷川(2006)が指摘するように「もはや韓流ブームはすっかり定着し、日本文化と韓国文化の貴重な架け橋となりつつある」(p.51)と思われる⁽³⁾。

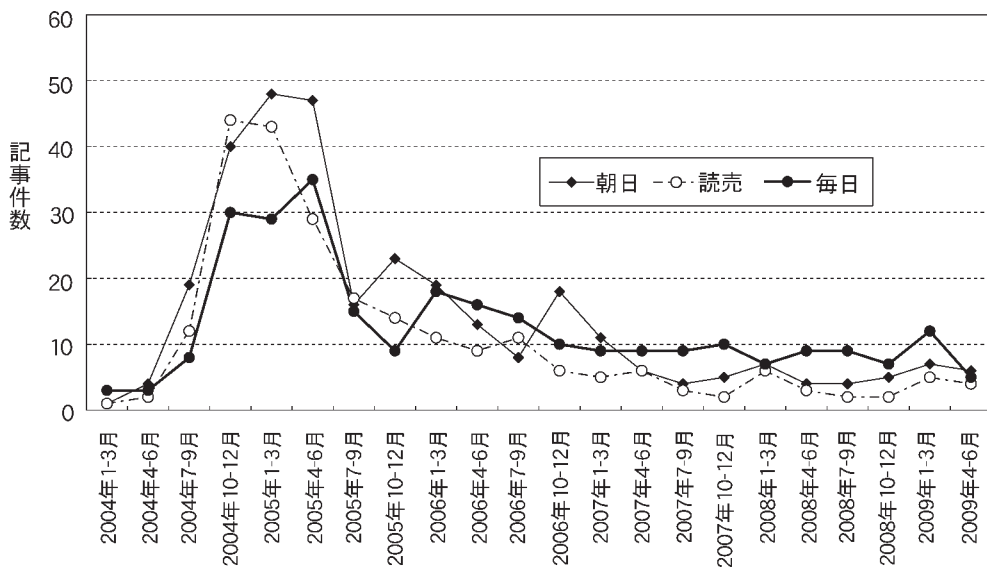


図1 4半期ごとに見るタイトルに「韓流」を含む記事件数の変遷

注：記事検索は、@niftyデータベースサービスを用いて行った。記事には地方面・地域面に掲載されたものも含んでいる。

1.2 日韓関係の現状に対する認識

日本と韓国の関係が良好かどうかに対する人々の判断や評価は、その時々様々な出来事(例えば、ワールドカップ日韓共催や首相の靖国神社参拝など)に大きな影響を受け、時代によりかなり変動する。実際、内閣府が毎年秋に実施している世論調査によると、日韓関係を良好だと考える人の割合は、過去20年ほどの間に35%から60%の間でかなり大きな変動を見せている(図2参照)。例えば、比較の日韓関係が良好と判断されていた1988年はソウルオリンピックが開催され、日本のメディアもこのオリンピックを大きく取り上げた。この例からも、メディアイベントがあると世論が大きく変化することがわかる。

近年の状況を見ても、日韓ワールドカップ共同開催の2002年や「冬のソナタ」などの韓流ドラマがヒットした2003～2004年に日韓関係を良好と判断した人は、約56～60%と過去20年ほどの間で最も高くなっている。しかしその後、日韓関係に関する世論は急速に悪化し、2005年に日韓関係を良好と判断した人は約40%と大きく落ち込み、2006年には約35%と過去20年ほどの間で最低となっている。2005年には、島根県で「竹島(韓国名・独島)の日」条例が制定されたことを機に、韓国では反日感情が高まり、また2006年にはこの竹島問題や靖国参拝問題(この年の8月15日に小泉元総理が靖国神社を参拝)に対する韓国の反発があった。このように、日韓関係の良好度の判断は、その時々

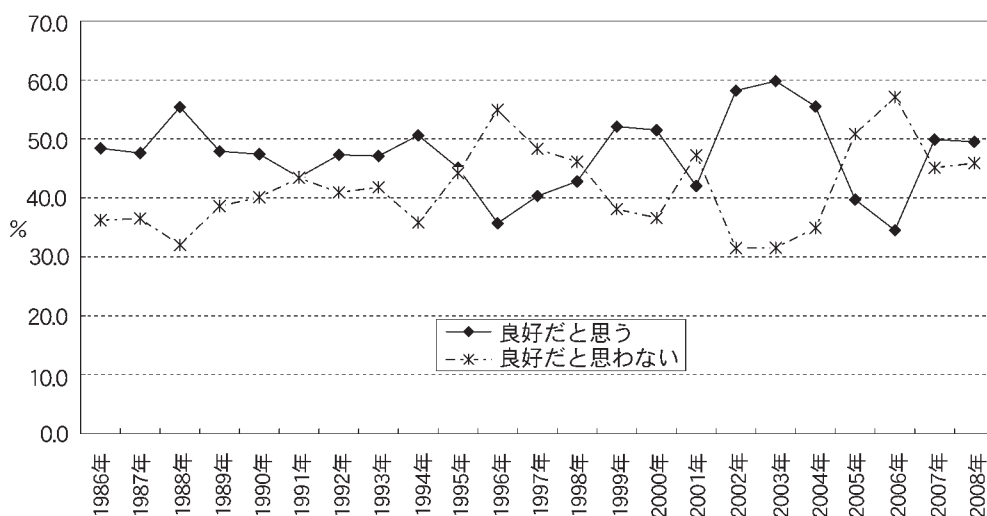


図2 日韓関係に関する世論の変遷

注：内閣府の「外交に関する世論調査」〈<http://www.8.cao.go.jp/survey/index-gai.html>〉に報告されている各年度のデータを元に作成。なお「一概にいけない」と「わからない」はいずれも数パーセントであるため表記していない。

(のメディアによる報道)によって大きく変動する。

尾嶋・小林(2003)による世論動向の研究では、2002年のワールドカップ日韓共同開催などにより、韓国の好嫌についてのイメージは一時的に好転したが、イベント効果は短期的であったことを明らかにしている。同様に、世論調査結果の変化を見る限り、韓流ブームが日韓関係の現状認識に与えた影響も短期的であるように見える。しかし、この点については、もう少し詳しく分析しておく必要がある。本稿では、韓流ブームとの関連からこの日韓関係の良し悪しの判断について詳しく検討していく。

2. 方 法

今回の調査は、東京都民(東京都全域に住む20～74歳の男女個人)を対象に、2006年11月下旬から12月下旬にかけて郵送法により実施した。調査対象者は、選挙人名簿から層化多段抽出法にて無作為に抽出した1000名である。手続きとして、まず調査への協力を依頼するハガキを調査対象者1000名全員に郵送、その1週間後に返信用封筒とともに調査票を送付した。さらにその2週間後に調査票返送を促すハガキを送った。その結果、367名から有効回答を得た⁽⁴⁾。

今回の調査では、性別、年齢、学歴などの基本属性や訪韓経験の有無、韓国人の友人の有無、韓国に対する関心度、様々なメディアを通じた韓国情報への接触頻度、韓国・韓国人に対するイメージ、韓流ブームに対する意識、日韓関係に対する現状認識、日韓相互理解の促進に関する意識など多岐にわたって尋ねた。

まず、回答者の属性について簡単に見ておくと、性別については男女ほぼ半々で(男性184名、女性183名)、平均年齢は男性51.1歳(SD=14.5)、女性49.3歳(SD=14.8)であった。最終学歴については、中学(旧制高等小学校)が6.8%、高校(旧制中学校、旧制高等女学校)26.4%、各種専門学校10.9%、短期大学(旧制高校、高等専門学校)9.8%、大学41.4%、大学院4.4%、不明0.3%となっている。

訪韓経験については77.1%(男性72.8%、女性81.4%)の回答者がこれまで一度も韓国を訪れたことがないと答えている。訪韓経験のある人について、約半数の40名が1回、14名が2回であり、3回以上訪韓経験がある回答者は20名であった。韓国語を勉強したことがあるかどうかについても、9割以上の回答者がこれまで学習経験がないと答えている。

次に、韓国のことをどのくらい知っているかを4件法で尋ねたところ、「よく知っている」1.4%、「まあ知っている」19.9%、「あまり知らない」67.3%、「全く知らない」9.3%で(「無回答」が2.2%)、韓国のことをある程度以上知っている回答者は約2割程度と少数であった。この韓国に関する知識度について基本属性との関連を調べたところ、

韓流ブームと対韓意識

男女差は見られなかったが、年齢との関係を見ると、「よく知っている」もしくは「まあ知っている」人の割合が、20代～30代で14.5%、40代～50代で24.8%、60歳以上で24.5%と、40歳未満の回答者に韓国について知っていると答えた人の割合が若干低かった($\chi^2=12.60$, $df=6$, $p=.050$)。また、学歴との関連を見ると、学歴の高い人たちがほど韓国に関する知識度が高かった($\chi^2=17.22$, $df=6$, $p=.009$)。

また、韓国が好きかどうかを尋ねたところ、好き嫌いがほぼ半々に分かれる結果となった。具体的には、韓国が「好き」と答えた回答者が8.2%、「どちらかといえば好き」41.4%であるのに対して、「どちらかといえば嫌い」39.2%、「嫌い」4.4%となっている。基本属性との関連について、性別や学歴との関連は見られなかったが、年齢については、若い層ほど韓国に好意的感情を持つ傾向が見られた($\chi^2=11.24$, $df=6$, $p=.081$)。

普段韓国に関する情報を主にどこから得ているかを、いくつかの選択肢の中から複数回答で選んでもらった結果、「テレビ(地上波、NHKのBS1・BS2)」81.7%、「新聞」61.0%、「本や雑誌」37.1%、「家族・友人・知人の話」28.9%、「インターネット」14.2%、「劇場公開の映画(ビデオ・DVDも含む)」11.4%、「衛星放送・ケーブルテレビなどの専門チャンネル」10.1%、「その他」2.7%、「学校の授業」1.6%となっていた。また、6.4%の回答者が「特に韓国の情報は得ていない」と答えている。さらに、同じ選択肢の中から、最も多く情報を得ているものを選んでもらった結果、やはり「テレビ」が57.5%と多く、2位の「新聞」17.1%、3位の「本や雑誌」8.4%を大きく引き離していた。この最も多く情報を得ているものについては、男女差が見られ、テレビを選んだ人の割合が、男性では50.0%であったのに対し、女性では64.5%に達していた。一方、新聞をあげた人の割合は、男性では25.0%であったが、女性では9.7%であった。また、年齢については、年齢が上がるほど新聞を1番にあげる人の割合が高くなっていた(20～30代で7.9%、40～50代で13.3%、60歳以上で31.1%)。

韓国人の知り合いがいるかどうかを聞いたところ、約半数の52.3%が「韓国人の知り合いはいない」と答えている。「名前を知っている程度の人がいる」という人が13.4%、「挨拶をする程度の人がいる」7.6%、「簡単な会話をする人がある」7.1%、「学校の友だち・学校時代の友人がいる」6.8%、「仕事を通じた付き合いのある人がある」14.7%、「プライベートな付き合いのある親しい友人がいる」6.8%、「韓国人の配偶者や親戚がいる」2.2%、「その他」3.0%となっていた。なお、韓国人の知り合いがいる人の割合には、性別や年齢などの基本属性による違いは見られなかった。

3. 結 果

3.1 韓国に対する関心度

まず、韓国に対する関心度について見ておく。今回の調査では、韓国に対する関心度を測るため、韓国の政治、経済、食文化、スポーツなど9つの異なる側面について、それぞれ「非常に関心がある」から「全く関心がない」までの4件法で尋ねた。図3に示すように、最も多くの回答者が関心を持っていたのは「韓国の食文化」で、7割近くの回答者が「関心がある」(「非常に関心がある」+「まあ関心がある」)と答えている。これに「韓国の歴史や伝統文化」(59.3%)、「韓国の政治」(54.6%)、「韓国の経済」(50.6%)が続き、「韓国の映画やテレビドラマ」は34.3%と関心を持っていたのは回答者の約3分の1であった。なお、この9項目の中では「韓国の流行音楽(Kポップ)」が最も関心度が低かった(8.4%)。

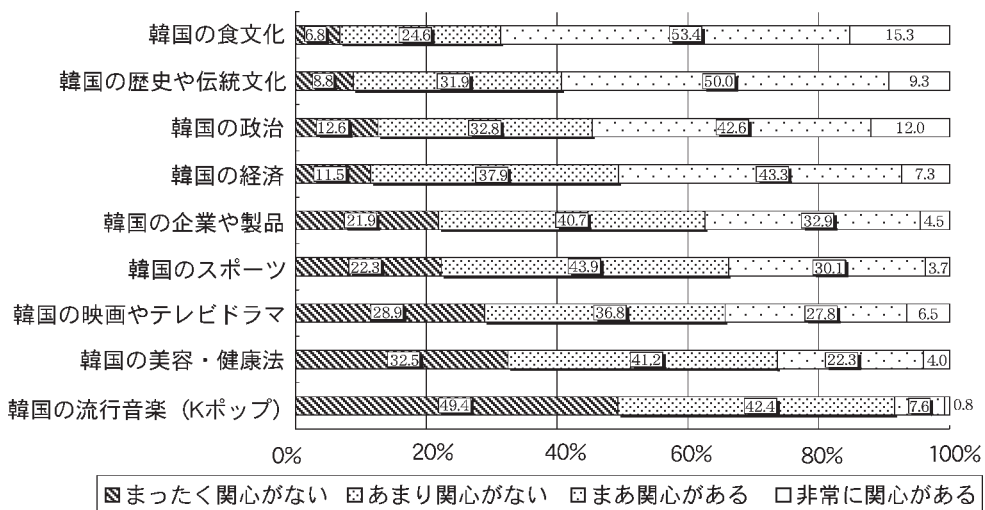


図3 韓国の諸領域に対する関心度

これらの9項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った結果、固有値1以上の基準で、表1のような2因子が抽出された。

第1因子には、政治や経済、伝統文化などが高い負荷量を持っていたため、この因子は「政治・経済・歴史への関心」と呼べるであろう。第2因子には、テレビドラマや美容・健康法など、ソフト面に関する項目が高い負荷量を持っていたので、この因子は「大衆文化面への関心」と名づけられよう。ここでは、以下の分析のため「韓国の経済」、「韓国の政治」、「韓国の歴史や伝統文化」、「韓国の企業や製品」の4項目を合計し、「政治・経済・歴

表1 韓国の諸分野に対する関心度の因子分析結果

	F 1	F 2
韓国の経済	.860	-.006
韓国の政治	.840	-.102
韓国の歴史や伝統文化	.589	.327
韓国の企業や製品	.543	.329
韓国のスポーツ	.387	.336
韓国の流行音楽(K ポップ)	.059	.784
韓国の映画やテレビドラマ	.040	.735
韓国の美容・健康法	.072	.624
韓国の食文化	.277	.459
因子寄与	2.32	2.09
寄与率(%)	25.82	23.26

史への関心」尺度を作成した($\alpha = .796$)。同様に、「韓国の流行音楽(K ポップ)」、「韓国の映画やテレビドラマ」、「韓国の美容・健康法」、「韓国の食文化」の4項目を合計し、「大衆文化への関心」尺度を作成した($\alpha = .742$)。なお、「韓国のスポーツ」は両方の因子に関係していたが、負荷量はいずれもそれほど高くなかったので、以降の分析からは除外した。

次に、韓国に対して関心を持っている人の特徴を調べるために、上記の「政治・経済・歴史への関心」および「大衆文化への関心」の2つの尺度得点を目的変数とし、基本属性や訪韓経験、韓国人の友人の有無、韓国に対する好意度を説明変数とした重回帰分析を行った。

まず、韓国の政治・経済・歴史への関心について見てみると、年齢が上がるにつれ($\beta = .197$, $p = .000$)、また学歴が高い人ほど($\beta = .153$, $p = .005$)関心度が高い。さらに、韓国人の友人のいる人の方がいない人より($\beta = .200$, $p = .000$)、訪韓経験のある人の方がいない人より($\beta = .125$, $p = .014$)関心度が高い。性別では、若干男性の方が女性より韓国の政治・経済や歴史への関心が高い傾向が見られた($\beta = .095$, $p = .066$)。

韓国の大衆文化への関心については、男性より女性($\beta = -.294$, $p = .000$)、若い人ほど($\beta = -.120$, $p = .023$)関心度が高い。また、訪韓経験のある人の方がいない人($\beta = .176$, $p = .001$)より関心度が高い。学歴については、若干学歴の高い人ほど韓国大衆文化への関心が低い傾向が見られた($\beta = -.097$, $p = .079$)。

3.2 韓流ブームに対する評価

今回の調査では、韓流ブームという現象がどの程度認識されていたのかを調べた。「日

本では近年韓国の俳優や歌手の人気の高まり、『韓流ブーム』などと呼ばれています。あなたは、この韓流ブームについてどの程度ご存知ですか」という問いに対して、「詳しく知っている」は2.7%と少数であったが、63.2%が「ある程度知っている」と答えている。一方、「あまり良く知らない」と答えた人は28.6%、「全く知らない」という人は4.4%であり、回答者の多くは韓流ブームについてある程度の知識を持っていたようだ。基本属性との関係については、年齢や学歴との間には関連は見られなかったが、性別では、知っている人（「詳しく知っている」+「ある程度知っている」）の割合が女性73.1%に対して、男性60.2%と10ポイント以上の開きが見られた（ $\chi^2=6.75$, $df=2$, $p=.009$ ）。

なお、日本では韓流ブームがある一方、近年韓国でも日本の大衆文化開放が段階的に進んでいるが、調査では、回答者がこのことをどの程度知っているのかも尋ねたところ、「詳しく知っている」という人は1%未満とほとんどいなかったが、半数近くの46.6%が「ある程度知っている」と答えている。一方、「あまりよく知らない」が40.6%で、「全く知らない」という回答は1割程度であった。この項目についても基本属性との関係を調べたが、性別や年齢との間には有意な関連は見られなかった。しかし、学歴については、学歴の高い人たちほど大衆文化開放についてある程度知識を持っている人の割合が高かった（ $\chi^2=9.67$, $df=2$, $p=.008$ ）。

次に、調査回答者（ただし、「韓流ブーム」について「全く知らない」と答えた人は除いた）が韓流ブームについてどのように考えているのかを、表2にあげた6項目を用いて「全くその通りだと思う」から「全然そう思わない」までの5段階評価で尋ねた結果について見ていく。

まず、『韓流』ブームは日本と韓国の民間レベルでの交流を促進した」という見方に、

表2 韓流ブームに対する評価

	思全 わ然 ない そう いう	思あ わま ない そう は	いど えち ない とも	まあ そう 思う	だ全 く思 うの 通り
	%	%	%	%	%
「韓流」ブームは日本と韓国の民間レベルでの交流を促進した	2.3	9.0	11.9	56.2	20.6
「韓流」ブームは日韓関係の改善に貢献した	4.1	20.1	27.4	39.4	9.0
「韓流」ブームにより、歴史認識問題など政治的な問題がかすんでしまった	11.4	35.1	32.2	17.3	4.1
一時のブームで終わらず、今後も韓流現象は続いていく	5.8	21.8	41.6	29.4	1.5
「韓流」ブームは一部のマスコミが作り上げたものだ	4.6	20.7	31.1	34.3	9.2
日本のマスコミは「韓流」ブームを大げさに取り上げすぎだ	2.9	15.5	19.2	39.8	22.6

約 77 % の回答者が「そう思う」(「全くその通りだと思う」+「まあそう思う」)と答えているのに対して、「そう思わない」(「全然そう思わない」+「あまりそう思わない」)と答えた人は 1 割程度で、この点については調査回答者の大半は韓流ブームを肯定的に評価していると言える。

同様に、「『韓流』ブームは日韓関係の改善に貢献した」と思うかどうかについても、ほぼ半数が「そう思う」と回答しており、この点についても比較的多くの回答者が韓流ブームを肯定的に見ていることがわかる。一方、約 4 分の 1 の回答者は日韓関係の改善に貢献したとは考えていない。

また、この韓流現象が一時のブームで終わらず今後も続いていくかどうかについては、続くと考える人と続かないと考える人がどちらも 3 割程度と意見が分かれていた(なお、この間に対しては、42 % の回答者が「どちらとも言えない」としている)。

ところで、韓流ブームによって、歴史認識問題などの政治的な問題がかすんでしまったという意見も一部で聞かれるが、このような意見について今回の回答者はどのように考えているであろうか。調査結果を見ると、半数近くの回答者はそうは思わないとしているが、この意見に賛成の人も約 2 割程度いることがわかる。

同様に、「『韓流』ブームは一部のマスコミが作り上げたものだ」および「日本のマスコミは『韓流』ブームを大げさに取り上げすぎだ」という、韓流ブームについての否定的見方について尋ねた項目について見ると、「ブームはマスコミが作り上げたものだ」という意見に賛成する回答者が約 44 %、「マスコミは『韓流』ブームを大げさに取り上げすぎだ」については 62 % の回答者が賛成しており、韓流ブームについては、必ずしも好意的評価だけがなされているわけではないことがわかる。

では、こうした韓流ブームに対する評価には、性別や年齢などの基本属性や訪韓経験、韓国人の友人の有無などによって違いはあるだろうか。その点について検討するためクロス集計を行ったところ、表 3 のような結果となった。この表に示すとおり、韓流ブームに対する評価には、男女の違いがかなりはっきり見られる。また、韓国が好きか嫌いかによっても、ブームに対する評価に大きな違いが見られた。

まず、男女差について、今回の結果を見る限り、いずれの項目についても、男性より女性の方が韓流ブームを好意的に捉えていることがわかる。例えば、韓流ブームが日韓関係の改善に貢献したと思うかどうかについて、女性回答者では約 55 % が「そう思う」と答えているのに対して、男性回答者では 42 % と 10 ポイント以上低かった($\chi^2=7.748$ 、 $p=.021$)。一方、「韓流ブームは一部のマスコミが作り上げたものだ」と見なしている人が、男性では 53 % いたのに対して、女性では 34 % であった($\chi^2=12.391$ 、 $p=.010$)。同様に、「マスコミは『韓流』ブームを大げさに取り上げすぎだ」と感じている回答者が、

表3 韓流ブームに対する評価と基本属性などとの関連

		民間レベルの交流促進 %	日韓関係の改善に貢献 %	政治的な問題がかすんだ %	韓流現象は続く %	マスコミが作り上げた %	大げさに取り上げすぎ %
性別	男性	73.1	42.0	22.5	26.3	52.9	69.0
	女性	80.5	54.6	20.2	35.3	34.3	56.0
年齢	20～39 歳	78.4	51.0	22.5	22.5	46.1	66.7
	40～59 歳	82.7	54.0	20.9	35.3	38.8	57.6
	60 歳以上	67.3	38.2	20.8	33.0	47.2	64.8
最終学歴	中学・高校	75.7	40.4	21.1	32.7	47.3	63.2
	専門・短大	74.6	50.7	28.2	32.4	36.6	56.3
	大学・大学院	78.4	53.1	18.6	29.0	44.2	65.0
訪韓経験	なし	77.9	46.4	20.8	29.5	42.4	63.2
	あり	72.7	55.3	22.4	32.5	48.1	61.0
韓国人の知り合い	いない	78.9	51.4	20.8	30.7	43.6	60.6
	いる	72.5	43.3	21.8	29.4	44.2	66.9
韓国好き嫌い	好き	85.2	56.6	18.9	39.8	36.4	56.5
	嫌い	67.1	39.3	24.3	20.0	51.4	71.1

注：表中のパーセントは「まあそう思う」および「全くその通りだと思う」と答えた人の合計。

太字になっている部分は χ^2 検定の結果 5 % 水準で有意差の見られたもの。

女性 56 % に対して男性 69 % ($\chi^2=6.302$ 、 $p=.043$) と 10 ポイント以上の開きが見られる。韓流ブームによって、歴史認識問題などの政治的な問題がかすんでしまったという意見については、「そう思う」という回答者の割合は男女それぞれ 2 割程度と大きな違いは見られないが、そう思わない(「全然そう思わない」あるいは「あまりそう思わない」という回答が女性で 53 % にのぼるのに対して、男性は 41 % となっている ($\chi^2=8.494$ 、 $p=.014$)。

また、「韓国が好きか嫌いか」で見ると、当然ながら韓国が好きな人の方が、「韓流」ブームを好意的に捉えている。例えば、韓国が好きと答えた人(「好き」もしくは「どちらかと言えば好き」)では、85 % の人が韓流ブームは民間レベルでの日韓交流を促進したと考えているのに対して、韓国が嫌いと答えた人(「嫌い」もしくは「どちらかと言えば嫌い」)では 67 % にとどまる。ただし、韓国が嫌いな人でも約 3 分の 2 の人が韓流ブームは民間レベルでの日韓交流を促進したと考えている点は重要であろう。同様に、「『韓流』ブームは日韓関係の改善に貢献した」かどうかについて、韓国が好きと答えた人では 57 % が「そう思う」と答えているのに対して、韓国が嫌いと答えた人では、39 % であった ($\chi^2=17.72$ 、 $p=.001$)。

韓流ブームと対韓意識

韓流ブームに対する評価について、さらに詳しく分析するため、次に、韓流ブームに対する評価を尋ねた 6 項目に対して因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、固有値 1 以上の基準で 2 つの因子が抽出された。表 4 に示すとおり、「日本と韓国の民間レベルでの交流を促進した」、「日韓関係の改善に貢献した」、「今後も韓流現象は続いていく」という韓流に対する肯定的見方について尋ねた 3 項目が第 1 因子に高い負荷量を持っていた。ここでは、以降の分析のためこの第 1 因子に高い負荷量を持っていた 3 項目の得点を合計し、「韓流ブームに対する好意的意見」尺度を作成した($\alpha = .745$)。次に、第 2 因子に高い負荷量を持っていたのは、「韓流ブームは一部のマスコミが作り上げたものだ」および「日本のマスコミは韓流ブームを大げさに取り上げすぎだ」という韓流に対する否定的見方について賛否を尋ねた項目であった。ここでも、同様に、第 2 因子に高い負荷量を持っていた 2 項目を合計し「韓流ブームに対する非好意的意見」尺度を作成した($r = .705$)。

なお、『韓流』ブームにより、歴史認識問題など政治的な問題がかすんでしまった」という項目は、第 1 因子、第 2 因子に対して、ともに因子負荷量は高くなかったので、以降の分析からは除外した。

表 4 韓流ブームに対する見方の因子分析結果

	F 1	F 2
「韓流」ブームは日韓関係の改善に貢献した	.843	-.085
「韓流」ブームは日本と韓国の民間レベルでの交流を促進した	.714	-.080
一時のブームで終わらず、今後も韓流現象は続いていく	.517	-.254
日本のマスコミは「韓流」ブームを大げさに取り上げすぎだ	-.250	.834
「韓流」ブームは一部のマスコミが作り上げたものだ	-.174	.797
「韓流」ブームにより、歴史認識問題など政治的な問題がかすんでしまった	.129	.141
因子寄与	1.60	1.43
寄与率(%)	26.61	23.81

次に、上述の 2 つの尺度得点を目的変数とし、性別などの基本属性や訪韓経験、韓国に対する好き嫌いなどを説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、まず「韓流に対する好意的意見」尺度に関して、高学歴の人($\beta = .140$, $p = .019$)、韓国が好きな人($\beta = .187$, $p = .002$)、「韓国大衆文化への関心」が高い人($\beta = .286$, $p = .000$)ほど、韓流の肯定的側面を高く評価していた。また、年齢が高い人ほど韓流を肯定的に捉えている傾向が見られた($\beta = .098$, $p = .093$) (表 5 参照)。

「韓流に対する非好意的意見」尺度に関しては、「学歴の低い人」($\beta = -.165$, $p = .006$)、「韓国の大衆文化への関心」が低い人($\beta = -.364$, $p = .000$)、「韓国の政治・経

済・歴史への関心」が高い人($\beta = .141$ 、 $p = .020$)ほど、韓流ブームに対して否定的に捉えていた(表 6 参照)。

表 5 「韓流に対する好意的意見」尺度得点を目的変数にした重回帰分析の結果

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	有意確率
(定数)	5.216	.923		.000
性別	-.439	.270	-.097	.105
年齢	.015	.009	.098	.093
学歴	.214	.091	.140	.019
韓国人の知り合いの有無	-.348	.262	-.073	.186
訪韓経験の有無	-.173	.301	-.032	.565
韓国に対する好き嫌い	.608	.195	.187	.002
韓国政治・経済・歴史への関心	-.020	.055	-.022	.715
韓国大衆文化への関心	.273	.062	.286	.000

$R = .411$ 、 $R^2 = .169$; $F(8, 301) = 7.649$ 、 $p = .000$

表 6 「韓流に対する非好意的意見」尺度得点を目的変数にした重回帰分析の結果

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	有意確率
(定数)	10.010	.790		.000
性別	.217	.229	.056	.344
年齢	-.012	.008	-.091	.120
学歴	-.214	.077	-.165	.006
韓国人の知り合いの有無	.033	.223	.008	.882
訪韓経験の有無	.443	.256	.097	.085
韓国に対する好き嫌い	-.178	.165	-.065	.281
韓国政治・経済・歴史への関心	.109	.047	.141	.020
韓国大衆文化への関心	-.297	.053	-.364	.000

$R = .389$ 、 $R^2 = .151$; $F(8, 306) = 6.816$ 、 $p = .000$

3.3 韓国ドラマ・映画の視聴実態

まず、回答者が普段韓国のテレビドラマや映画(ビデオやDVDでの視聴含む)をどの程度見ているのかを尋ねたところ、「見たことがない」と答えた人が29.4%、「年に数回程度もしくはそれ未満」が43.1%、「月に1回程度」が4.9%、「月に2～3回程度」が5.7%、「週に1回程度」が12.8%、「週に2～3回程度」が1.6%、「週に4～6回程度」が0.5%、「毎日」が0.3%となっていた(無回答は1.6%)。今回の調査では、約7割の回答者が多かれ少なかれ韓国のテレビドラマや映画の視聴経験があったことになる。

この韓国ドラマ・映画の視聴経験や視聴頻度に性別や年齢の違いがあるかどうかを調べてみたところ、表7に示すとおり、年齢では有意差は見られなかったが、性別については

「見たことがない」人の割合が女性の方が男性より 10 ポイント以上低く、また視聴頻度が高い人は女性に多かった。多くの論者が指摘するように、今回の韓流ブームは、女性(特に中高年女性)が牽引役となっていたことを示すものである。

表 7 性別および年齢層別に見た韓国テレビドラマ・映画の視聴経験／視聴頻度

	男性 % (n=180)	女性 % (n=181)	20～39 歳 % (n=105)	40～59 歳 % (n=144)	60 歳以上 % (n=112)
見たことがない	36.1	23.8	26.7	30.6	32.1
年に数回程度もしくはそれ未満	46.7	40.9	54.3	41.0	37.5
月に 1 回程度	2.8	7.2	4.8	6.9	2.7
月に 2～3 回程度	6.1	5.5	4.8	6.3	6.3
週に 1 回程度	7.2	18.8	9.5	11.8	17.9
週に 2～3 回程度以上*	1.1	3.9	0.0	3.5	3.6
	$\chi^2=20.88, p=.001$		$\chi^2=13.95, p=.175$		

*「週に 4～6 回程度」および「毎日」を含む

なお、「始めから終わりまで見ていなくてもよいので、これまで韓国のテレビドラマや映画を何作くらい見たことがあるか」を尋ねたところ、テレビドラマは平均 3.3(SD=7.25)・中央値 2.0、映画は平均 2.9(SD=5.10)・中央値 2.0 であった。ただし、テレビドラマでは 100、映画では 50 という外れ値が見られたので、それを除くと、テレビドラマは平均 2.9 作品・シリーズ(SD=3.64)、映画は平均 2.7 作品(SD=3.78)となる。

また、今回の調査では、日本での韓流ブームの牽引役となった「冬のソナタ」の視聴についても尋ねた。その結果、韓国ドラマ・映画の視聴経験者の 57.6%(回答者全体では 45.5%)にあたる 167 名が見たことがあると答えている。ただし、見たことがある人でも「1～2 回見たことがある」(91 名)もしくは「数回見たことがある」(46 名)が多数を占めており、「何度も見たことがある」という人は 30 名と視聴経験者の 1 割程度であった。ちなみに、NHK が 2004 年 9 月に行った全国調査では、調査回答者の 38%がこのドラマを見たことがあると答えている(三矢, 2004)。いずれの調査結果においても、一度でも見たことのある人という基準で考えれば、「冬のソナタ」は韓国ドラマとしては異例のヒットを記録したものと言える。

次に、韓国のテレビドラマや映画を視聴したことによって韓国に対する見方に変化があったかどうか尋ねた結果、「変わらない」と答えた回答者が多かったが、韓国に対する見方が好転したと答えた人もサンプル全体の約 25%、韓国ドラマ・映画の視聴経験者に限れば約 36%いた(一方、ごく少数ではあるが、韓国に対する見方が悪くなったと答えている

回答者も見られた)。なお、参考のため記すと、上記の2004年NHK調査では、「冬のソナタ」を見たことがきっかけで「韓国のイメージが変わった」という人が、このドラマの視聴経験者の26%(調査回答者全体では10%)という結果が示されている。今回の我々の調査では、「冬のソナタ」視聴に限定しているわけではなく、「韓国のテレビドラマや映画」全般の視聴による影響という形で尋ねている。おそらくそれが一因であろうが(もちろん調査対象者や実施時期も異なるが)、韓国イメージが好転したと答えた人の割合は、NHK調査より今回の調査の方が高いという結果になっている。

3.4 韓流ブームの波及効果

今回の調査では、韓国のテレビドラマや映画を視聴したことがきっかけで何か始めたことがあるかを複数項目に渡って尋ねた。その結果、韓国への旅行や韓国語の勉強を始めた、韓国製品をよく買うようになったなどの行動への直接的影響をあげた人は、いずれも2~3%以下という少数であった。具体的には、「韓国への旅行」9名、「韓国語の勉強」9名、「韓国のことについて勉強(言葉以外)」9名、「韓国製品をよく買うようになった」7名、「韓国の俳優や歌手のファンクラブへの参加」1名、「韓国人の友人作り」1名の延べ36名であった。しかし、複数項目をあげた回答者が7名いたため、重複を除いて上記のうちのいずれか1つでも始めた人は26名(有効回答者全体の7.1%、韓国ドラマ・映画の視聴経験者の10.3%)であった。

前述の2004年NHK調査でも、「冬のソナタ」視聴をきっかけに行った韓国文化への接触については、例えば「韓国語を学習するようになった」や「旅行に行った」はいずれも2%、「韓国人の人とつきあうようになった」は0.2%と少数であった。

このように人口比に直すと低い数字ではあるが、例えば、韓国ドラマ・映画の視聴をきっかけに韓国へ旅行に出かけた人や韓国語の勉強を始めた人がたとえ2~3%でもいれば、その経済効果は決して無視できないものであろう。実際、多くの文献で指摘されるように、韓流ブームがもたらした経済効果は決して小さいものではない(e.g., 三矢、2004; 林夏生、2005)。

一方、「特に始めたことはないが、韓国への興味は増した」と答えた人が163名(韓国ドラマ・映画の視聴経験者の66.4%、有効回答者全体では44.4%)おり、特に韓国ドラマ・映画への接触頻度の高い人ほどその傾向が強かった。従って、大衆文化接触により相手国に対する関心が高くなっている回答者が少なくないことが確認された。

3.5 韓国・韓国人に対するイメージ

今回の調査では、表8にあるような12の形容詞対からなるSD尺度を用いて、日本人

および韓国人のイメージについて測定した。まず、日本人イメージと韓国人イメージに差があるかどうか t 検定を用いて検討したところ、「冷たい／暖かい」および「礼儀正しくない／礼儀正しい」の2項目を除く10項目において有意差が見られた。

表8に示すように、日本人(つまり自国民イメージ)の方が韓国人に比べて「誠実な」、「信用できる」、「細かい」、「親しみやすい」、「気性が穏やか」、「謙虚な」、「理性的」、「勤勉な」、「自己主張をしない」など、全般的に肯定的なイメージが強いことが示された。韓国人イメージで日本人よりもポジティブな評定を得ていたのは、「家族を大事にする」という項目のみであった。

表8 韓国人イメージおよび日本人イメージの各項目と平均値

	韓国人	日本人	t 値	有意確率
不誠実な—誠実な*	3.28	3.61	6.08	.000
信用できない—信用できる	2.98	3.41	7.32	.000
大雑把—細かい*	3.01	3.65	10.05	.000
冷たい—暖かい	3.08	3.13	0.89	.372
親しみにくい—親しみやすい*	2.94	3.17	3.73	.000
気性が激しい—気性がおだやか	2.07	3.60	20.82	.000
傲慢な—謙虚な*	2.73	3.45	10.97	.000
自己主張が強い—自己主張をしない	2.14	3.64	20.18	.000
家族を大事にしない—家族を大事にする*	4.17	3.28	-13.73	.000
感情的—理性的	2.01	3.33	19.01	.000
礼儀正しくない—礼儀正しい*	3.45	3.44	-0.08	.934
勤勉でない—勤勉な	3.46	3.74	4.62	.000

注：数値は5段階評定によるもので、点数が高いほど右側の形容詞に近づくことを示している。

なお、*は集計の際、点数を逆転させた項目。

次に、どのような変数が韓国人イメージと関連があるかを調べるために、各SD項目ごとに相関分析を行った結果、最も多くの項目で有意な関連を示したのは学歴で、学歴の高い人ほど韓国人を「誠実で」($r=.135$, $p=.012$)、「信用でき」($r=.198$, $p=.000$)、「暖かく」($r=.152$, $p=.005$)、「礼儀正しく」($r=-.117$, $p=.030$)、また「勤勉」($r=.174$, $p=.001$)であると考えており、高学歴の人ほど好意的な韓国人イメージを持っていた(表9参照)。

性別との関連を見ると、「冷たい／暖かい」($r=-.167$, $p=.002$)および「気性が激しい／気性がおだやか」($r=-.152$, $p=.004$)で有意な関連が見られ、女性の方が肯定的な韓国人イメージを持っている。一方、「自己主張が強い／自己主張をしない」($r=.113$, $p=.035$)では、男性の方が、韓国人は「自己主張をしない」というイメージを持っている人が若干多かった。韓国ドラマ・映画の視聴頻度との関連については、視聴頻度の高い

表 9 韓国人イメージと基本属性などの諸変数との相関

	性別+	年齢	学歴	友人+	訪韓+	ドラマ
不誠実な—誠実な*	-.051	-.099	.135	.032	.029	.027
信用できない—信用できる	-.015	-.091	.198	.104	.064	.021
大雑把—細かい*	.027	.108	-.003	-.081	-.131	.003
冷たい—暖かい	-.167	-.112	.152	-.025	.057	.080
親しみにくい—親しみやすい*	-.086	-.033	.043	.053	-.003	.122
気性が激しい—気性がおだやか	.069	.080	-.017	-.083	-.017	.010
傲慢な—謙虚な*	-.053	.044	-.069	-.048	-.119	.155
自己主張が強い—自己主張をしない	.113	.067	.034	.016	.017	.058
家族を大事にしない—家族を大事にする*	-.152	-.016	-.028	.053	-.029	.074
感情的—理性的	.000	.068	.032	-.010	-.089	.123
礼儀正しくない—礼儀正しい*	-.054	-.098	.117	-.012	-.023	.060
勤勉でない—勤勉な	-.020	-.133	.174	.049	-.066	.009

注：表中の数字は相関係数。*は逆転項目。太字の部分は5%水準で有意差あり。+はダミー変数(男性=1、女性=0；韓国人の友人あり=1、韓国人の友人なし=0；訪韓経験あり=1、訪韓経験無し=0)。「ドラマ」は韓国のテレビドラマや映画の視聴頻度。

人ほど、韓国人に対して「親しみやすく」($r=.122$ 、 $p=.024$)、「謙虚で」($r=.155$ 、 $p=.004$)、「理性的」($r=.123$ 、 $p=.023$)なイメージを持っていた。

さらに、この韓国人に対するイメージ12項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、固有値1以上の基準で、4因子が抽出された(表10参照)。

表 10 韓国人のイメージ項目についての因子分析結果

	F 1	F 2	F 3	F 4
誠実な—不誠実な*	.666	-.026	.167	.104
礼儀正しい—礼儀正しくない	.627	-.228	.193	.106
信用できない—信用できる*	.568	.140	-.091	.217
冷たい—暖かい	.548	.119	.288	-.095
謙虚な—傲慢な*	.501	.091	.314	-.451
親しみやすい—親しみにくい	.486	.026	-.083	-.096
感情的—理性的*	.206	.733	-.024	.096
自己主張が強い—自己主張をしない	-.033	.651	.120	.017
気性が激しい—気性がおだやか*	.081	.597	-.042	.039
家族を大事にする—家族を大事にしない*	.295	-.510	.119	.086
勤勉でない—勤勉な*	.086	-.031	.630	.107
細かい—大雑把	.089	.072	.136	.546
因子寄与	2.10	1.68	0.71	0.62
寄与率(%)	17.49	14.00	5.91	5.16

*は逆転項目

第1因子に高い負荷量を持っていたのは、「不誠実な／誠実な」、「礼儀正しくない／礼儀正しい」、「信用できない／信用できる」、「冷たい／暖かい」、「傲慢な／謙虚な」、「親しみにくい／親しみやすい」の6項目である。本稿では、以降の分析のためにこの6項目を合計して「韓国人イメージ」尺度を作成した($\alpha = .738$)。

なお、第2因子には、「感情的／理性的」、「自己主張が強い／自己主張をしない」、「気性が激しい／気性がおだやか」、「家族を大事にしない／家族を大事にする」の4項目が高い負荷量を持っていたが、「家族を大事にしない／家族を大事にする」は他の3項目とマイナスの相関を示していた。また、第3因子で因子負荷量が高かったのは「勤勉でない／勤勉な」のみ、第4因子で因子負荷量が高かったのは「細かい／大雑把」のみであった。

続いて、「韓国人イメージ」尺度得点を目的変数とし、性別などの基本属性や訪韓経験の有無、韓流ドラマ接触頻度などを説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、男性より女性($\beta = -.125$, $p = .036$)、学歴の高い人($\beta = .163$, $p = .008$)ほど韓国人イメージが肯定的であった。また、韓流ドラマ接触頻度の高い人($\beta = .111$, $p = .053$)ほど韓国人イメージが良い傾向が見られた。年齢や韓国人の友人の有無、訪韓経験の有無などについては有意な関連は見られなかった(表11 参照)。

表11 韓国人イメージ尺度得点を従属変数にした重回帰分析の結果

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	有意確率
(定数)	17.757	.956		.000
性別	-.792	.375	-.125	.036
年齢	-.015	.013	-.068	.245
学歴	.348	.130	.163	.008
韓国人の知り合いの有無	.112	.371	.017	.763
訪韓経験の有無	-.390	.431	-.051	.366
テレビ視聴時間	.000	.002	.007	.902
韓国ドラマ接触	.246	.002	.111	.053

$R = .241$, $R^2 = .058$; $F(7, 318) = 2.809$, $p = .008$

なお、韓国人イメージと韓流ドラマ接触頻度との関連については、言うまでもなく今回のような1回限りの調査だけでは因果関係まで言及することは出来ない。つまり、韓国のドラマや映画を視聴したことによって韓国人イメージがよくなったのか(その可能性ももちろんあるのだが)、あるいは元々韓国人に対してよいイメージを持っていた人の方が韓流ドラマ・映画をより頻繁に視聴したのか、といった点については、今回の調査だけからは明らかにできない。今後さらに調査研究が必要な点である。

今回の調査では、さらに韓国という国のイメージを表12に示すような7つの形容詞対

を用いて測定した。韓国が男性中心か男女平等かについては、6割近くの回答者が男性中心社会というイメージを持っていて、男女平等だと考えている人は8.5%しかいなかった。個人主義的か集団主義的かについても、約57%の回答者が集団主義的と考えており、韓国が個人主義的な国だと思っている人は1割にも満たない。また、開放的か閉鎖的かについても、44%が韓国は閉鎖的というイメージを持っており、開放的と答えた回答者は約14%であった。さらに8割近い回答者が韓国は学歴重視社会であると考えており、一般的には、回答者の多くが韓国に対して伝統的・閉鎖的社会というイメージを持っていることが明らかになった。

表 12 韓国に対するイメージ項目と度数分布

A	A だ と 思 う %	い ど う ち と ら A か と %	い ど え ち な ら い と も %	い ど う ち と ら B か と %	B だ と 思 う %	B
男性中心	19.7	38.3	33.5	6.2	2.3	男女平等
集団主義的	17.2	39.7	34.6	6.8	1.7	個人主義的
開放的	3.7	10.5	41.8	35.0	9.0	閉鎖的
学歴重視	50.7	28.0	17.0	3.1	1.1	学歴重視でない
軍事力が強い	23.7	43.1	27.3	4.2	1.7	軍事力が弱い
治安の悪い	4.5	15.5	46.8	28.7	4.5	治安の良い
経済的に豊か	4.8	31.7	47.8	13.8	2.0	経済的に貧しい

一方、治安や経済面については、治安が悪いと考えている人より治安は良いと考えている回答者の方が多く(20% vs. 33.2%)、また経済的に豊かだと思っている人の方が、経済的に貧しいと思っている人より多かった(36.5% vs. 15.8%)。なお、約67%の人は、韓国は軍事力が強い国だと考えている。

次に、この7つの形容詞対について因子分析を行った結果、いずれの手法を用いても因子がきれいに分かれなかったため、ここでは項目ごとに分析を行って行く。韓国イメージと基本属性などとの関連を調べた結果、表13にまとめたとおり、「軍事力が強い／軍事力が弱い」については、男性の方が女性より軍事力が弱いと考えており($t=2.45$ 、 $p=.015$)、治安が良いか悪いかについては、60歳以上の人が60歳未満の人より($F(2,352)=5.045$ 、 $p=.007$)、また学歴が低いほど($F(2,351)=8.315$ 、 $p=.001$)治安が悪いと考えていた。しかし、この2項目以外はいずれの変数とも有意な関連は認められなかった。

表 13 韓国イメージと基本属性との関連

	男性 中心	集団 主義的	閉鎖的	学歴 重視	軍事力 が強い	治安の 良い	経済的 に豊か
全体	2.33	2.36	3.35	1.76	2.17	3.13	2.76
男性	2.27	2.30	3.41	1.75	2.29	3.16	2.74
女性	2.39	2.42	3.30	1.76	2.06	3.11	2.79
20～39 歳	2.34	2.34	3.41	1.70	2.20	3.23	2.70
40～59 歳	2.37	2.38	3.29	1.70	2.21	3.23	2.76
60 歳以上	2.25	2.35	3.38	1.91	2.09	2.91	2.82
中卒・高卒	2.45	2.30	3.29	1.85	2.12	2.90	2.76
短大・専門	2.40	2.44	3.37	1.84	2.03	3.05	2.76
大卒・大学院	2.22	2.37	3.40	1.67	2.27	3.33	2.77
韓国人知り合い無	2.40	2.36	3.34	1.78	2.13	3.15	2.75
韓国人知り合い有	2.20	2.36	3.39	1.71	2.19	3.09	2.77
訪韓経験なし	2.34	2.31	3.37	1.80	2.17	3.13	2.73
訪韓経験あり	2.29	2.53	3.31	1.60	2.09	3.10	2.86

注：表中の数字は平均値。表 12 の「A だと思う」に 1 点、「どちらかという A」に 2 点、「どちらともいえない」に 3 点、「どちらかという B」に 4 点、「B だと思う」に 5 点を与えて計算した。太字の部分は t 検定ないしは分散分析において 5 % 水準で有意差あり。

3.6 日韓関係の現状に対する認識

今回の調査では、「現在、日本と韓国の関係は良い方だと思いますか。それとも良くない方だと思いますか」という項目を用いて、日韓関係の現状に対する評価を尋ねた。この間に対して、「非常に良い」と答えた人が 0.6 %、「まあ良い」と答えた人が 37.3 %、「あまり良くない」と答えた人が 57.9 %、「全く良くない」と答えた人が 4.2 %であった。本稿の「序」でも言及した内閣府が毎年実施している「外交に関する世論調査」において、2006 年 10 月に実施された調査の結果では、日韓関係が良好と考えている人（「良好だと思う」もしくは「まあ良好だと思う」の合計）は 34.5 %と過去 20 年ほどの間で最も低くなっている。調査実施時期はほぼ同じであるものの、内閣府の世論調査は全国調査であり、一方、今回の我々の調査は東京都民を対象にしたものであるため単純な比較は出来ないが、この 2 つの調査で日韓関係を良好と考えている人の割合は 35 %～38 %と大差は見られない。

では、日韓関係の現状に対する認識にはどのような要因が関係しているのだろうか。まず、性別や年齢などの基本属性、訪韓経験、韓国人の友人の有無、韓国が好きか嫌いかなどとの関連をクロス集計で検討した。表 14 に示すとおり、性別や学歴との関連は見られなかったが、年齢については 60 歳以上の人たちに日韓関係が良くないと感じている人

表 14 日韓関係の現状に対する認識と諸変数との関連

		良い ¹ %	良くない ² %
性別	男性	36.4	63.6
	女性	39.3	60.7
		$\chi^2=0.33$ 、 $p=.566$	
年齢	20～39 歳	43.3	56.7
	40～59 歳	41.1	58.9
	60 歳以上	28.4	71.6
		$\chi^2=6.05$ 、 $p=.049$	
最終学歴	中学・高校	35.4	64.6
	専門学校・短大	39.2	60.8
	大学・大学院	39.2	60.8
		$\chi^2=0.46$ 、 $p=.793$	
訪韓経験	なし	34.7	65.3
	あり	49.4	50.6
		$\chi^2=5.53$ 、 $p=.019$	
韓国人の知り合い	いない	37.0	63.0
	いる	39.2	60.8
		$\chi^2=0.17$ 、 $p=.684$	
韓国に対する好き嫌い	好き	48.6	51.4
	嫌い	24.8	75.2
		$\chi^2=20.15$ 、 $p=.000$	
保革自己イメージ	保守的	38.5	61.5
	中間	44.0	56.0
	革新的	28.4	71.6
		$\chi^2=4.80$ 、 $p=.091$	
小泉外交の評価	非常に評価している	47.8	52.2
	ある程度評価している	43.1	56.9
	あまり評価していない	39.4	60.6
	全く評価していない	19.6	80.4
		$\chi^2=10.42$ 、 $p=.015$	

注：1＝「非常に良い」＋「まあ良い」、2＝「あまり良くない」＋「全く良くない」

の割合が高かった($\chi^2=6.05$ 、 $p=.049$)。また、訪韓経験とも有意な関連が見られ、訪韓経験のある人の方がなしの人より日韓関係を良好と捉えていた(49.4 % vs. 34.7 % ; $\chi^2=5.53$ 、 $p=.019$)。さらに、韓国が好きか嫌いとも関連が見られ、韓国が好きと答えた人の半数は日韓関係が良好だと考えているが、韓国が嫌いと感じた人の中で日韓関係が良いと考えているのは4分の1程度であった(48.6 % vs. 24.8 % ; $\chi^2=20.15$ 、 $p=.000$)。

次に、政治的に保守的かリベラルかで日韓関係の現状に対する評価に違いがあるのでは

ないかと考え関連を調べてみたが、日韓関係が良好と答えた人の割合は、自分を保守的と考える人で 38.5 %、中間と考える人で 44.0 %であるのに対して、革新的と考える人では 10 ポイント以上低く 28.4 %であった($\chi^2=4.80$ 、 $p=.091$)。さらに、小泉前首相のアジア外交に対する評価との関連も検討したが、小泉アジア外交を「全く評価していない」と答えた人たち(56 名)は、他の回答者と比べて日韓関係が良好と考える人の割合が著しく低かった($\chi^2=10.42$ 、 $p=.015$)。

それでは、現在の日韓関係を良いと思うのか、あるいは良くないと思うのかは、どのような理由によるのだろうか。言い換えれば、人々は何を基準に日韓関係の良し悪しを判断しているのであろうか。日本と韓国における二国間関係と言っても、そこには政治的側面から、経済面における関係、さらには文化的交流など様々な側面での関係がありうるが、通常、世論調査などではそうした側面について細かく分けて訊くわけではなく、単に「日韓関係が良いと思うか悪いと思うか」について尋ねることが多い。しかし、調査に回答する側が日韓関係に関わるどのような側面を念頭におき、その時々での関係の良し悪しを判断しているのかは、必ずしも明らかではない。様々な点を総合的に判断して回答する人もいるであろうが、多くの場合は、政治的側面における関係とか、文化面における人的交流など、各自が重視する、あるいは特に関心を持っている側面を念頭において日韓関係の現状を判断しているのではないだろうか。仮にそうだとすると、日韓関係に対する評価といっても、人により判断基準が異なっている可能性がある。

そこで、今回の調査では、日韓関係の良し悪しの判断理由に関して自由記述で答えてもらった。その結果、311 名(有効回答の約 85 %)から回答が得られた。また判断理由についての記述は、日韓関係を良いと思う回答者と悪いと思う回答者の双方からほぼ均等に得られた。

付録の表に一部の例を載せたが、結果を見ると、日韓関係を良好と見なしている人には、「日本では、韓流ブームで俳優や歌手が人気で、また、日本の歌手も韓国で人気があるので、よくなってきていると思う」とか「歴史的な問題は残っているが、韓流ブームで一般の人たちはある程度の交流があり、お互いの国のことを知ろうとしていると思うので」といった韓流ブームに関することを理由にあげている人が多い。また、「日韓ワールドカップ以来、文化の交流が広がっている。そして、私自身、韓国への親しみが深くなった」、「日韓ワールドカップにより、若い人の間の距離が近くなった」など、2002 年の日韓ワールドカップ共同開催を理由にあげている回答者も複数見られた。総じて、日韓関係を良好と見なしている人には、韓流やサッカーのような大衆文化レベルでの交流の活発化を理由にあげている人が多い。つまり、日韓関係を良好と見なしている人たちは、概ね、領土問題や歴史認識の違いなどより、文化交流の進展から現在の日韓関係について判断し

ているようである。

一方、日韓関係を良くないと考えている人たちには、その理由として、小泉元首相の靖国参拝や竹島問題・歴史認識のずれなど、政治がらみの問題をあげている人が多く、彼らは主に政治的・歴史的側面から日韓関係の良し悪しについて判断しているようだ。「日韓ワールドカップや日本文化の開放など、関係は良いほうに向かっていると思うが、過去の歴史について何かと言われると、根本的なところではよくなっているとは思えない」など、文化的側面ではよい方向に向かっているが、それだけでは両国間の関係改善にはすぐには結びつかない、といった意見も見られた。また、「国をあげて反日教育を行っている」など、韓国における反日教育を理由にあげている回答者も複数見られた。

いずれにせよ、日韓関係を良いと見なすか悪いと見なすかは、政治的・歴史的側面を主に見るのか、それとも文化交流の側面を主に見るのかによって、判断が分かれているようである。

ここまでは、日韓関係に対する評価と基本属性などとの2変量関係、および評価の判断理由について見てきたが、以下では、韓流ブームに対する評価なども含めて、日韓関係の現状に対する認識と諸変数間の関連をさらに詳しく検討していく。

本稿では、現在の日韓関係を「非常に良い」もしくは「まあ良い」と答えた回答者を肯定的＝1とし、「あまり良くない」もしくは「全く良くない」と答えた回答者を否定的＝0と分類したダミー変数を目的変数とした重回帰分析を行った。説明変数には、基本属性に加えて、韓国に対する好意度、韓国人の友人の有無、保革自己イメージ、小泉元首相のアジア外交に対する評価、韓流の肯定的側面に対する評価(上述)を一括投入した。

表15に示すとおり、日韓関係に対する認識と性別や年齢などの属性には有意な関連は

表15 日韓関係の現状に対する認識を目的変数にした重回帰分析の結果

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	有意確率
(定数)	.056	.220		.800
性別 ¹	.051	.056	.052	.366
年齢	-.003	.002	-.094	.105
学歴	-.017	.020	-.051	.389
韓国に対する好き嫌い	.107	.041	.156	.009
韓国人の知り合いの有無	.001	.057	.001	.982
保革自己イメージ	-.034	.027	-.070	.204
小泉外交評価 ²	.065	.033	.110	.049
韓流の肯定的側面の評価 ³	.051	.012	.241	.000

$R = .377$ 、 $R^2 = .142$ ； $F(8, 296) = 6.122$ 、 $p = .000$

注：日韓関係の現状に対する認識：肯定的＝1、否定的＝0のダミー変数。¹男＝1、女＝0、

²点数が高いほど評価が高い、³点数が高いほど評価が高い。

見られなかったが、韓国に対して好意的な人ほど($\beta = .156$ 、 $p = .009$)、また韓流の肯定的側面を高く評価している人ほど($\beta = .241$ 、 $p = .000$)、日韓関係を良好と見なしていた。さらに、小泉元首相のアジア外交に対する評価が高い人ほど($\beta = .110$ 、 $p = .049$)、現在の日韓関係を良いと考えていた。

3.7 日韓相互理解の促進について

今回の調査では、日韓関係に対する評価に続いてさらに、「今後日本と韓国の相互理解を促進させていくためにどんなことが必要だと思うか」について、表16にあるような項目を用いて国レベルと民間レベルに分けて尋ねた。まず、リストの項目について複数回答の結果から見ていくと、国レベルでは「歴史認識についての議論を深める」(61.9%)や「未解決の領土問題を解決する」(55.3%)など政治に関する問題をあげるものが最も多い。一方、民間レベルについては、「文化の交流を盛んにする」(62.7%)が最も多く、次いで「スポーツの交流を盛んにする」(46.3%)を重要と考える人が多かった。

次に、これらの項目の中で「最も重要と考えるものはどれか」と尋ねたところ、「国レベルで、歴史認識についての議論を深める」が27.2%と最も多く、次いで「国レベルで、未解決の領土問題を解決する」が13.6%、「国レベルで、経済交流・協力をもっと活発にする」が11.4%であり、この3つで約5割を超える。4番目に多い回答は、「民間レベル

表16 日本と韓国の相互理解を促進させていくために必要なこと

	重要と考えるもの (複数回答)	最も重要と考えるもの
国レベルで	%	%
経済交流・協力をもっと活発にする	42.8	11.4
歴史認識についての議論を深める	61.9	27.2
未解決の領土問題を解決する	55.3	13.6
文化の交流を盛んにする	40.1	3.8
スポーツの交流を盛んにする	25.1	0.8
学術・教育の領域で交流を盛んにする	32.4	3.0
その他	3.5	1.4
民間レベルで	%	%
経済交流・協力をもっと活発にする	33.5	4.1
歴史認識についての議論を深める	37.3	7.6
未解決の領土問題について互いに理解を深める	27.8	2.2
文化の交流を盛んにする	62.7	6.8
スポーツの交流を盛んにする	46.3	0.8
学術・教育の領域で交流を盛んにする	39.8	3.5
その他	2.7	1.4

で、歴史認識についての議論を深める」(7.6%)で、「民間レベルで、文化の交流を盛んにする」(6.8%)がそれに続いている。

日韓関係を良好と考えているか否かで、回答パターンに違いがないか調べたところ、日韓関係に対する評価にかかわらず、最も多くあげられたのは「国レベルで、歴史認識についての議論を深める」であった。しかし、日韓関係が良いと考えている人では、「国レベルで経済交流・協力をもっと活発にする」(17.1%)、「国レベルで未解決の領土問題を解決する」(13.0%)、「民間レベルで文化の交流を盛んにする」(11.4%)と続いているのに対して、日韓関係が悪いと考えている人では、「国レベルで未解決の領土問題を解決する」(17.1%)、「民間レベルで歴史認識についての議論を深める」(10.6%)と続き、歴史認識や領土問題の解決で7割以上を占めていた(表17参照)。

表17 日本と韓国の相互理解を促進させていくために最も重要なこと

	関係良い ¹ %	関係良くない ² %
国レベルで歴史認識についての議論を深める	24.4	35.2
国レベルで経済交流・協力をもっと活発にする	17.1	10.1
国レベルで未解決の領土問題を解決する	13.0	17.1
民間レベルで文化の交流を盛んにする	11.4	5.5
民間レベルで経済交流・協力をもっと活発にする	7.3	3.0
国レベルで文化の交流を盛んにする	7.3	2.5
民間レベルで歴史認識についての議論を深める	5.7	10.6
その他 ³	13.8	16.1
$\chi^2=19.34, df=7, p=.007$		

注：¹日韓関係を「非常に良い」もしくは「まあ良い」と思っている人、²日韓関係を「あまり良くない」もしくは「全く良くない」と思っている人。³上位7項目以外を「その他」にまとめた。

4. 考 察

本稿では、質問紙調査データをもとに、人々の韓流ブームに対する評価、韓国のテレビドラマや映画の視聴実態、韓国ドラマ・映画視聴による韓国・韓国人イメージの変化の有無などについて検討してきた。また、韓流ブームとの関連を念頭において、人々の日韓関係の現状に対する認識や日韓相互理解の促進についての意識について見てきた。

「韓流」ブームをどのように捉えるかについては、熱烈に歓迎する人から、批判的な視線を向ける人まで、様々な立場が存在する。韓流に対する批判については、小倉(2005)が「アンチ韓流」の論点を簡潔にまとめているが、それによると「最も目立ったのが、『このようなミーハー的な隣国へのまなざしによって、歴史問題など日本人がもっと真摯に向き

合わなくてはならない問題が忘却ないし隠蔽されてしまう』というものである」(p. 176)⁽⁵⁾。このような批判があることを念頭において、今回の調査では「『韓流』ブームにより、歴史認識問題など政治的な問題がかすんでしまった」という意見への賛否も尋ねた。実際にそうした事態が生じたのかどうかについては今後の論証が必要であるが、いずれにせよ今回の東京都民を対象にした調査データをみると、この意見に賛同する人々は、2割程度と割合は少ないものの一定数存在する。また、「韓流」ブームをマスコミが大きさに取り上げすぎたと感じている人も6割以上であった。

しかし、一方で、「『韓流』ブームは日本と韓国の民間レベルでの交流を促進した」とか「『韓流』ブームは日韓関係の改善に貢献した」という意見に対しては、多くの回答者が賛成の意を表明している。従って、都民の韓流ブームに対する捉え方には、プラスの評価とマイナスの評価の双方が混在していた。

では、実際に韓流ブームは何をもたらしたのか。韓流ブームが日韓関係にもたらしたものに關しては様々な評価があり、必ずしも肯定的なものだけではない。鄭(2004)は韓流ブームに関連して、「新しいプロパガンダや情勢の変化は、日本人の心の中にある韓国についての善と悪、プラスとマイナスといった対のイメージの一方を浮上させるが、そのことはもう一つのイメージや感情が消え去ってしまうことを意味するのではない」(p.16)と述べ、韓流ブームによって韓国に対する肯定的見方が増加したとしても、事態はそう単純ではないと注意を喚起している。また、木村(2007)は、韓国側の反応について、日本における韓流ブームによって韓国人のナショナル・プライドが向上したことにより、韓国人の日本への関心をむしろ減退される結果になっている、と指摘している。韓流という現象が日韓関係にもたらした影響に關して、今後も検証を重ねていく必要がある。

本研究の検討課題の1つに、韓国ドラマ・映画の視聴が韓国・韓国人に対する見方に影響を及ぼしているのか、ということがあった(もちろん、これも韓流ブームがもたらした影響の一側面であるが)。これまで多くの既存の研究が示すとおり、韓国に限らず、外国・外国人イメージ形成にマスメディアが果たす役割は大きい(e.g., 鮑戸・原、2000；向田ほか、2001；Saito, 1999)。対象となる外国との直接的接触の度合いが少ない場合、特にマスメディアからの情報は非常に重要な役割を果たすことになる。今回の調査回答者について言えば、訪韓経験のある人は4分の1程度で、経験のある人でも訪韓回数はかなり限られており、彼らの韓国・韓国人イメージの形成や変化にテレビを始めとするマスメディアが大きな影響力を持っていることは想像に難くない。しかし、映像に關して言えば、比較的最近まで日本では韓国のテレビドラマや映画はそれほど簡単に視聴できる環境にはなく、主にニュース番組や日本のドラマや映画を通じて韓国に接してきたと言ってよいだろう。その状況が韓流ブームとともに急激に変わってきた。

韓国のドラマや映画は、日本における韓流ブームの象徴とも言えるが、その韓国ドラマ・映画の視聴は韓国に対する見方に影響を及ぼしているのか。今回の調査結果を見ると、韓国に対する見方が良くなったという回答者が、韓国ドラマ・映画の視聴経験者の4割近くおり、大衆文化交流がもたらしうる好影響を示す1つのデータを提供している。また、今回の調査データによると、韓国ドラマ・映画を視聴したことで韓国に対する興味が増大した人も多かった。さらに、上述したように、因果関係までは特定できないものの、韓国ドラマ・映画の視聴頻度の高い人ほど韓国人イメージが良かったことも明らかになった。

もちろん、こうしたイメージ改善や関心の増大は所詮一時的ないしは表層的なものにすぎないという批判もあるだろう。すでに言及したように、尾嶋・小林(2003)はワールドカップ日韓共同開催によって一時的に韓国イメージは好転したが、単発的なイベントとしての効果は長続きするものではなく、イベント直後の「熱気」と人的交流関係の強化に支えられる「常態」とを区別する必要性を指摘している。すでに一時期の熱狂ぶりは見られないものの、現在韓流はブームを超えて定着した感があるが、今回の韓流ブームによる韓国イメージ改善なども一時的なものとして終わるのかどうか、さらに検証を続けて行く必要がある⁽⁶⁾。

人々が日韓関係の現状についてどう判断しているのかについては、「1. 序」でも言及した内閣府の時系列世論調査データを見ると、時期によりかなり大きく変動するが、2006年は特に日韓関係を良好だと思う人の割合が低い。今回の調査でも、二国間の関係を良好と見なしている人は約4割程度であった。内閣府の調査によると、韓流ブームが頂点に達していた2004年後半には日韓関係を良好だと思う人が6割近くいたが、わずか2年後にはそれが約35%まで急落している。この内閣府の調査結果に関して、朝日新聞が2006年12月10日に「韓流ブーム、今は昔?」と題する記事を載せているが、その中で日韓関係を良好と考える人が激減した理由として、「小泉前首相の靖国神社参拝や、日韓両国が領有権を主張する竹島(韓国名・独島)周辺の海洋調査をめぐる対立が影を落としたとみられる」(韓流ブーム、今は昔?、2006、p.3)と分析している。確かに、こうした世論調査結果の数字を見ると、韓流ブームが日韓関係の良し悪しに対する判断に与えた影響は短期的であるように見える。おそらくそうした理解は、基本的には正しいのであろう。しかし、今回の調査データを詳細に見てみると、もう少し違った側面も見えてくる。

前章では、質問紙調査の自由記述をもとに、都民がどのような理由で日韓関係の現状を判断しているのかを多少詳しく見てきた。要点を繰り返すと、日韓関係を良好と見なしている人は、韓流ブーム(や日韓ワールドカップ共催)など近年の大衆文化の交流を理由にあげている人が多かったが、日韓関係を悪いと判断している人は、主に未解決の政治問題・歴史問題を理由にあげていた。つまり、日韓関係の現状をどう判断するかは、政治的・歴

史的側面を主に念頭において考えるのか、それとも文化的交流の側面を主に念頭において考えるのかが判断の分かれ道になっている。そして、大衆文化交流を念頭において判断した人たちには、依然韓流ブームは影響を持ち続けていたことになる。ただ、2005年～2006年には二国間に関する様々な未解決の政治的・歴史的問題がメディアなどで再びクローズアップされたため、韓流ブームがピークであった頃に比べると、文化交流の活発化を念頭において日韓関係の現状を判断した人がかなり減った、ということであろう。

本稿ではそこまで踏み込んだ分析が出来なかったが、ではどのような人が政治的・歴史的側面を主に念頭において日韓関係を判断するのか、どのような人が大衆文化交流を主に念頭において日韓関係を判断するのか、そこにメディア報道との接触はどのように関わっているのか、などについてさらに研究を進めて行く必要がある⁷⁾。

1980年代後半に日本と韓国の間で人的・経済的交流が盛んになる中で、日本人の韓国イメージが、無関心や避関心に基づく否定的なものから、「文化的、娯乐的、大衆的」な関心に基づく異質なエキゾチズムへと変化したと分析している鄭(1995)は、相互の交流や浸透という状況が、認識の豊かさをもたらすよりも、むしろ差異を強調し摩擦や葛藤の要因として作用すると指摘した。こうした議論も念頭におきつつ、韓流が日韓関係にもたらした(あるいは現在ももたらしつつある)影響について、今後さらに検証を続けて行く必要があらう。

注

- (1) 本論文は、東京女子大学比較文化研究所の総合研究22(メディアと日韓相互イメージ)の助成を受けて行われた研究成果の一部である。なお、本論文で用いる質問紙調査データの実験結果の一部については、2007年9月に早稲田大学において開催された日本社会心理学会第48回大会において、プロジェクトメンバー全員の連名で4本の論文発表を行った。
- (2) ただし、「韓流」を見出しに含んでいるからといって、必ずしもその記事が韓国大衆文化について書かれたものとは限らない。新聞が「韓流」ブームをどのように報道してきたかを詳細に知るには、記事の内容分析が必要になるが、それは別の研究課題であり、ここではこの問題には立ち入らない。
- (3) 韓流現象が単なる一時の「ブーム」で終わったのか、それとも「定着・自然化」したのかについては、論者により意見が様々に分かれる。本稿では、韓流と呼ばれる韓国大衆文化の受容はある程度定着しているという立場に立つが、この問題は、別途改めて詳細な検討を要する課題かもしれない。
- (4) 本論文で主に扱う質問紙調査を2006年末に実施する前に、まず日本人と韓国人を対象にしたインタビュー調査を実施した(インタビュー調査は、李津娥が実施)が、ここではインタビュー調査については概略だけを記す。インタビュー調査は、2006年1月から3月にかけて、30代の主婦と大学生男女を対象に行われた。日本人のインタビュー協力者は14名、韓国人のインタビュー協力者は13名であった。インタビューは主に2名から4名のグループ単位で行ったが、日本人主婦2名に関しては諸般の事情から個別に行った。日本人を対象としたインタビュー調査では、1)韓流ブーム以前の韓国との接触状況や韓国への関心

度、2)韓流ドラマや映画への接触状況と韓流の波及効果、3)韓流ブームによる韓国・韓国イメージの変化、4)韓流ブームおよびそのメディアでの取り上げられ方や韓国報道に対する見方、などについて尋ねた。韓國人を対象としたインタビュー調査では、1)来日のきっかけ、2)来日前の日本との接触状況および日本への関心度、3)来日後の日本・日本人イメージの変化、4)韓流ブームおよびそのメディアでの取り上げられ方や相手国報道に対する見方、などについて尋ねた。

インタビュー調査の結果を簡単に紹介すると、日本人については、共通点はあるものの性別や年齢層によって、韓流ブームに対する見方や韓流ドラマなどの視聴のきっかけ、韓國大衆文化への接触頻度、韓流ブームのメディアによる取り上げ方に対する見方などはかなり異なることが明らかになった。また、韓流ブーム報道を含め、メディアを通じて伝えられる相手国情報が相互のイメージに影響を与えていることも確認された。

- (5) その最たるものが、国家権力が大衆文化を利用することによって複雑な政治的・歴史的問題を無化しようとしている、という批判である。
- (6) 小倉(2005)は「W杯前後から『韓流』ブームにかけてのマスコミ情報では韓國社会の暗部はほとんど伝えられなかったので、なにか薔薇色の幻想を韓國社会に抱いてしまう日本人も多い」(p.174)と注意を喚起しているが、今後メディアが韓國・韓國人イメージに与える影響の研究を進めていく際、こうした点も念頭においておく必要がある。
- (7) 本論で述べたように、政治的・歴史的側面を主に念頭において考えた人は日韓関係を悪いと判断し、大衆文化交流を主に念頭においた人は日韓関係を良いと判断したわけであるが、ではそもそもどういう人が世論調査に答える際に、例えば大衆文化交流を主に念頭において考えるのか、ということである。

引用文献

- 安貞美(2008)「日本における韓國大衆文化受容—『冬のソナタ』を中心に」『千葉大学人文社会科学研究』16、196-210。
- 鮑戸弘・原由美子(2000)「相手国イメージはどう形成されているか—日本・韓國・中国世論調査から—」『放送研究と調査』50(8)、56-93。
- 林香里(2005)『「冬ソナ」にハマった私たち—純愛、涙、マスコミ……そして韓國』文春新書。
- 林夏生(2005)「大衆文化交流から見る現代日韓関係」小此木政夫・張達重(編)『戦後日韓関係の展開』(pp.227-264)、慶應義塾大学出版会。
- 長谷川啓(2006)「韓流ブームとジェンダー」水田宗子・長谷川啓・北田幸恵(編)『韓流サブカルチャーと女性』(pp.47-57)、志文堂。
- 長谷川典子(2005)「テレビドラマ『冬のソナタ』の受容研究—日韓コミュニケーションの視点から—」『多文化関係学』第2号、15-30。
- 長谷川典子(2007)「韓國製テレビドラマ視聴による態度変容の研究—異文化間教育の視点から—」『異文化間教育』25、58-73。
- 韓流ブーム、今は昔？(2006)『朝日新聞 12月10日朝刊』3頁。
- 木村幹(2007)「ブームは何を残したか—ナショナリズムの中の韓流—」石田佐恵子・木村幹・山中千恵(編)『ポスト韓流のメディア社会学』(pp.203-228)、ミネルヴァ書房。
- 三矢恵子(2004)「世論調査からみた『冬ソナ』現象—『冬ソナ現象』に関する調査—」、『放送研究と調査』54(12)、12-22。
- 毛利嘉孝(2004)『「冬のソナタ」と能動的ファンの文化実践』毛利嘉孝(編)『日式韓流—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在—』(pp.14-50)、せりか書房。
- 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作(2001)「アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化」『社会心理学研究』16、159-169。

韓流ブームと対韓意識

- 小倉紀蔵(2005)『韓流インパクト』、講談社。
- 尾嶋史章・小林大祐(2003)「日韓共催と世論の動向」牛木素吉郎・黒田勇(編著)『ワールドカップのメディア学』(pp.199-222)、大修館書店。
- Saito, S. (1999) Television and Perceptions of U.S. Society in Japan, In Y. R. Kamalipour (ed), *Images of the U.S. Around the World: A Multicultural Perspective*(231-246), SUNY press: NY.
- 桜井泉・伊佐恭子・隈元信一(2001)「『韓流』の先に」『朝日新聞 12 月 25 日朝刊』 22 頁。
- 高野悦子・山登義明(2004)『冬のソナタから考える』岩波書店。
- 鄭大均(1995)『韓国のイメージ』中公新書。
- 鄭大均(2004)「対等な眺め合いへ一歩 新・韓国ブーム」『朝日新聞 9 月 13 日夕刊』 16 頁。
- 辻竜平(2005)「沈黙の螺旋としての『冬ソナ』・『韓流』ブーム—誰が語り誰が乗ったのか—」『明治学院大学心理学部附属研究所紀要』第 3 号、3-14。
- 戸澤美佐(2003)「韓国ドラマなぜ受ける—一分かりやすいシンデレラ物語」『毎日新聞 7 月 11 日夕刊』 7 頁。
- 李修京(2006)「日本の『韓流』現象と日韓交流の諸課題」『東京学芸大学紀要人文科学系 I』 57、85-96。
- 渡邊聡・石井健一・小針進(2004)「日本の若年層における韓国大衆文化の受容とアジア意識—首都圏および静岡県の大學生と高校生を対象とした調査から—」『国際関係・比較文化研究』 3(1)、73-94。

総合研究 22 研究員メンバー

- 斉藤慎一[現代教養学部教授 2005～07 年度総合研究 22 研究代表者]
- 李津娥[現代教養学部教授 2005～07 年度総合研究 22 研究員]
- 有馬明恵[現代教養学部准教授 2006～07 年度総合研究 22 研究員]
- 向田久美子[駒沢女子短期大学准教授 2005～07 年度総合研究 22 学外研究員]
- 日吉昭彦[文教大学情報学部専任講師 2005～07 年度総合研究 22 学外研究員]

〔2005～07 年度総合研究 22 (メディアと日韓相互イメージ) 共同成果発表〕

付表 日韓関係の現状認識に対する判断理由(一部)

日韓関係を「非常に良い」と答えた人の理由(例)

北朝鮮の問題が大きいから。また、経済の面でも協力が必要だから。

比較的文化交流が出来ていると思うから。

日韓関係を「まあ良い」と答えた人の理由(例)

日本では、韓流ブームで俳優や歌手が人気で、また、日本の歌手も韓国で人気があるので、よくなってきていると思う。

韓国のテレビドラマ・映画が紹介されて、「反日」のテレビ報道以外の情報がたくさん入ってくるようになったから。以前より、近いイメージに変わった。

韓流スターが日本に受け入れられているため。

歴史的な問題は残っているが、韓流ブームで一般の人たちはある程度の交流があり、お互いの国のことを知ろうとしていると思うので。

昔に比べ、日韓交流が盛んになったため。

政治的にはあまりよくないと思いますが、食文化や芸術、生活面ではお互いにいい影響を受けていると思う。

芸能文化の交流はよいと思います。が、歴史や戦争の考え方が違い、交流に温度があると思います。日本人のおばさまたちが韓国の芸能人のファンであって若い人はそうでもないのです。

冬ソナで、これまで自分が韓国に対して持っていた否定的なイメージが無くなり、とても日本と近い感性を感じたことから。

日韓ワールドカップ以来、文化の交流が広がっている。そして、私自身、韓国への親しみが深くなった。

最近はスポーツ・文化などの交流が活発になってきたから。

日韓ワールドカップにより、若い人の間の距離が近くなった。

竹島問題はありますが、今一番大きな問題として、朝鮮半島の平和という大きな課題に日・米・韓が協力して取り組んでいるので。

文化交流がずいぶん多くなってきている。

旅行・仕事などの民間交流が盛んだから。

以前より韓国に関するものをよく見かけるようになった。

領土問題等気になるが、芸術面で劇団四季等が公演をしているニュースや拉致問題にも協力して取り組んでいるように見えるから。

領土問題など未解決なことが多いが、経済などはお互いアジアを担っており必要としている。

政治のことはわかりませんが、同じ職場で働いている韓国の方を見かけますが、日本人と違和感なく感じています。

日本に韓国料理店が増えた。

日韓関係を「あまり良くない」と答えた人の理由(例)

小泉元首相の靖国問題。

日本の首相の靖国参拝。

靖国問題とか竹島問題。

北朝鮮に対する立場・考え方の違い。歴史認識の違いによるわだかまり。

領土問題などの歴史問題があるから。

領土問題や歴史認識について、両国で食い違いが生じているように思えるから。

靖国問題、領土問題等、解決すべき問題あり。拉致問題はもう少し協力的であってもよい。

政治的な状況が良くない。

テレビニュースの中で、日の丸を焼いたり、抗議デモをして日本に対して反応が過激。

戦争などの歴史的経緯。教科書問題。靖国参拝問題。

靖国問題に加え、北朝鮮核問題、拉致問題などで一致した対応や行動を取れそうにないため。

サッカーの試合で何か仲の悪そうなニュースをしていたから。

政治レベルでの摩擦が根底にあり、民間レベルの交流以上にクローズアップされているから。

なぜかお互いにライバル心があるような気がします。

お互いの間に敵対心のような溝があり過去を整理しない限り関係は改善されないと思う。

文化の交流は盛んになってきたが、政治的な問題が山積みしているから。日本人の韓流ブームは一方的なもので、韓国人の日本ブームはないから。

日韓ワールドカップや日本文化の開放など、関係は良いほうに向かっていると思うが、過去の歴史について何かと言われると、根本的なところではよくなっているとは思えない。

植民地時代の影響が強く残っていると思う。

好感を持たない相手には、こちらも好意的にはなれない。先に感情論があるため。

教育(敵国として日本)の影響。過去の戦争にこだわる。

韓国の教育(小さいころからの)に問題があるように思う。

日韓関係を「全く良くない」と答えた人の理由(例)

国をあげて反日教育を行っている。

反日教育と政府の姿勢。

靖国参拝問題、教科書問題、戦後処理の問題など。

「戦後」についての認識・態度に溝があるため。

韓国側が嫌っているから。

日本が韓国ブームになっているだけ。韓国は国レベルで親日派を圧迫している。

仲がいいのは表面だけで韓国人は日本を憎んでいるし、日本人はそれを疎んじていると思う。